

むらさき失せず

本田 禎子 北海道

夏至の陽を真下にうけて鉄線の花のむらさき色きはまりぬ
先生の目にとどくべく庭さきに結ひたる垣に咲きしむらさき
「定本宮柊二短歌集成」ひもときて（鐵線）の歌二首に会ひたり
ふたたびを訪ふ日あらんか三鷹台の通勤のみち夢路に迷ふ
押し花に手折りし鉄線花びらのむらさき失せず辞書の重みに

めがね立て

神保 外子 埼玉

足かけて登れさうなり飯桐の幹に五つのさるのこしかけ
「有毒」と札立ててあるタケニグサ虫に食はれて葉は穴だらけ
山桃の実を食べ終へて美しき尾長飛び去るグエーと鳴きて
難聴で声の大きいわたくしは元氣な人と思はれてゐる
卓におく夫の遺愛のめがね立て三十二年をわれ使ひきぬ

うはばみ

伊 沢 玲 千葉

沢沿ひに群るる 蟒うはばみ草くさのなか六尺を越す蟒蛇うはばみひそむ
金銀の箔を押すがに蟒蛇のつややかな背を照らすつくよみ
怖れられ孤絶を生くる蟒蛇がそれとは知らず呑む汚染水
蟒蛇にゆきどころなし汚染水を呑みたる腹の膨らみ切りて
蟒蛇のぬけがら白く陽に透きてそらみつ大和草木深し

無量大数

片岡

絢 神奈川

お葬式ごっこしたがるので死んだフリをしました子は泣きました
在宅勤務終へたゆふぐれ外へ出る とろりとろりと歩いてゆきぬ
夕焼けはいまこの時間この街のすみずみまでをふかく吸ひ込む
コンビニで子の欲しがつてゐたグミを発見！ ポーカーフェイスでレジへ
「オレのことどのくらい好き？」と聞く息子へ無量大数への語を教へよう

青が耀く

近藤 哲 夫 神奈川

究極の青が恋しい暑き午後デュフィの油彩のニースにあそぶ
混ぜること少なき主色の確かさやデュフィの油彩の青が耀く
馬刀葉椎の森の上なるしろき雲眉間にしわのなかりし父よ
口ふさぐ、爪びく、指呼する秋篠寺十二神将の手は多弁なり
呼ばれたがなにしろ今は取込み中ちよつと待つてね裏の小綬鶏

仕事時間

池田 恭子 東京

本読まずメールも打たず電話せず暮れゆく山を眺めてゐたり
寝静まる町の寝息に耳すまほんたうの私が起き上がる夜
夜半すぎて佳境に入るスタジオの仕事時間がまだ我にある
打ち合はせ、スタジオ作業、書く時間、なべて夜のこと我の生計は
この宇宙に我のみ覚めてゐるやうな夜の時間は黄金時間

傷のほひ

沢 麗子 富山

手ばかりを思ひて足は忘れてたぐちやぐちやになる
我がの背泳ぎ
すらり立つ少年のやうなセロリいま刻めば傷のほひして来る
洗濯機音たてながら作動して真夜潮騒を聴くごとく
ある
たたう紙に「麗子の浴衣」と書かれある母の字やさし今年こそ着む
家持の歌碑の向かうは奈古の海広がりを空の際まで

空白

故山 崎洋子 兵庫

タッチの差がまなかひに閉ぢるドア肩を乗り出す車掌、目が合ふ
善良と優しさといふ仮面ベルソナをはづしてあふるあかきぶだう酒
空き缶となる運命が確定のブラック・ボスを自販機に買ふ
全身の力がふわつと抜けてゆき我が吹き出しは空白となる
どんぶりを満たす男と空にする男の間あひをどんぶりがゆく

たぢろぎながら

浅野千里 香川

「食べてくれる？」差し出されたる真鱈五十たぢろぎながら戴きにけり
五十尾の鱈さばくにはまづ気合、鱈切包丁研ぎ立てよろし
七寸の真鱈は無駄なき流線形海を恋ふるかあをく光れり
腹に剣、尾の付け根にはぜいごにて身を守る鱈、もののふならん
子とわれと流れ作業にさばく鱈 たたきにフライ、めるもいいね

つゆびえ

吉里幸雄 福岡

ひとしづく(末期の水)も遣れざりき個室に汝は息を引きしも
白桃とさくらんばうを供へたり 梅雨の明くるをほんやりとまつ
つゆびえに月命日もすぎにけり 桔梗のはなのあやなき夕べ
ふるさとの山の畑のはぜの木の木叢に螻蛄けこのなきそむる頃か
夜のふけに眼鏡を拭けば鹿皮の指にやはらにかすかなる冷え

小さな森

立石千代女 長崎

出産にたちあひし 婿帰り来てばくばく食べる二十三時半
梅雨晴れに二枚のシーツ干し上がり孫の名前は青葉と決まる
婿殿は生れて十日の子を抱き「ゆりかごの唄」四番までうたふ
木と蔦のあひより見ゆる瓦屋根この家はもう小さな森だ
Tシャツはバン格拉デシユ製一〇〇〇円のうち工賃はいかほどなるや

知らずじまひ

田中久子 長崎

朝顔の鉢を廻して陽をあてて 東西南北花を咲かしむ
夕立にかけこむ子らを這入らせてくすの木少し枝を伸ばせり
園児らは送迎バスで往復し 知らずじまひの楽しい道草
でたらの歌をうたへば 道端のぺんぺん草が三味線を弾く
落ちてゐし頭を元に戻されて 大日如来が聞く蟬のこゑ